說を主張し皆往院は後說を主張す前說は疏主既に玄義分に問曰韋提既言得忍未審何時得忍出在何文答曰韋提得忍出在第七觀初等と玉へるが故に誰れか是非を論せんやされど光臺得忍も亦得たり今光臺得忍の義を辯ずべし今云く光臺所見の淨土は正しく眞報佛土なるが故に依正不二なり故に或は樂生安樂と玉ひ又は我今樂生彌陀等と玉へり況や序分義に光變作臺影現靈儀と云ふに於てをや又五會法事讃の光臺見土の處に韋提障盡見眞影と玉へり當麻寺の變像亦光臺の處に彌陀觀音勢至の三尊を畫けり然れば光臺に於て依正並見すること論を待たず然して今家の意は光臺に於て依正並見を以て得忍すると云ふに非らず如何となれば序分義に我今樂生等の文を釋して彌陀本國四十八願皆發增上勝因乃至致使如來密遣夫人別選也と玉へり是の釋意は韋提の選擇は釋迦韋提をして選ばしむるが故に卽ち釋迦の選擇なり故に密遣夫人別選と玉へり又釋迦の選擇は本師彌陀が釋迦をして選擇せしめ玉へる故に卽ち是れ彌陀の選擇なり此義を表して如來の上に致使の言を置けり故に具に釋して初には別願酬報の土體を示し次有此因緣致使如來密遣夫人別選也と玉へり此因緣とは正しく上の攝取衆生の別願所成の報土の因緣なり因樂顯通悲化とは釋迦諸佛の大悲攝化皆極樂の土德より然らしむることを示す法潤普攝群生也とは此の淨土の土德は必ず衆生を攝すると云ふことを示すなり之れを承けて有此因緣故等と玉へるなり然れば此土德より釋迦乃ち韋提をして選擇せしむるなりと示し玉へるが此の文意なり既に然るときは韋提の別選は全く機功に非らず但此二尊の他力より然らしむるなり韋提の別選既に他力なるときは樂生は固より他力廻向の信樂なること明かなり況んや樂生の二字眞佛土の上に冠しむるに於てをや故に定善義に序臨淨國喜歎無以自勝と玉ひ舟讃には得見極樂心歡喜と玉へり喜歎とは信心歡喜の相なり擧勸利益の經文には心歡喜故信心時卽得無生法忍と說き玉ふ然れば序分の歡喜豈に得益ならんや又事讃上に韋提致淸誓捨娑婆念々無遺決定求生極樂如來と玉ひ五會讃には韋提障盡見眞影と玉ふ此韋提の樂生が卽ち願作佛心なるが故に序分義に夫人悲心爲物同已往生永逝娑婆長遊安樂と玉へり此釋暗に韋提の度衆生の德を示し玉ふ故に豈光臺得忍に非ずして何ぞやされば祖師聖人

は愚禿鈔に韋提の選擇淨土を擧げて三經一致の選擇本願の旨を示し玉へり故に御本書總序文に淨業機彰釋迦韋提選安養等と玉ひ化卷本に因韋提別選正意開闡彌陀大悲本願斯乃此經隱彰義也等と玉へり豈に不如實の選擇と云はんや明に知る光臺得忍なること經釋共に其理明白なり然るに善導大師判して第七觀となし玉へるは別に所由あり一には大師は釋相廢立位に居し定散を以て能入とし念佛を以て所入とす卽ち定散より念佛に入る益を得る次第なり此れ從假入眞の經益を顯はさんが爲に弘願顯影第七觀に於て得益を示す實は第七觀の得忍と云ふは卽ち序分の得忍なり若し之れを序分に於て談ぜば卽ち正宗定善の說敎起るに由なし從假入眞の經益顯はれ難し故に序分の得忍を以て第七觀に於て是れを說き玉へるなりされば觀經には三位あり一に顯說謂く經の當分に約す二に隱彰謂く跨節に約す三に顯に就きて隱を示す謂く廢立意なり若し顯說に約せば韋提は定善修觀の人卽開卽觀して益を成す故に得忍の時處を定れば依正觀成の處にあるべし然れば經末正宗の終りを以て得忍の處とすべし諸師の釋正しく之れに准す若し隱說に約せば光臺得忍とす祖師に明判なしと云へども眞佛土に光臺の釋を引き信卷には欣淨緣及示觀緣の釋を引き玉へるは是れ光臺得忍の意なり若し廢立意に約せば七觀得忍とす大師の妙判是れなり卽ち從假入眞の經意を顯はし韋提の得忍は弘願の敎益とする義を示し玉へるなり二に爲未來世の敎意を顯はさんが爲なり何となれば光臺に淨土を見るが如きは全く釋迦の神力に依るが故に在世の衆生局限す然るに七觀の處に至りて除苦惱法の說を聞きて住立空中尊を見て吾人が往生成就の御相なりと信知するが故に韋提の見佛は未來の聞名に同す未來の衆生も名號の謂れを聞きて往生成就の御相ぞと信知するときは全く韋提の見佛に同じ是に於て爲未來世の敎義を成ず此義を顯はさんが爲に七觀得忍の義を談じ玉へるなりと知るべし三忍とは喜悟信の三忍なり六要鈔五爲正信偈大意に釋し玉へるが如く喜忍は願成就の信心歡喜の相にして心生歡喜と云ふが故に喜忍と云ふ悟忍とは觀經の廓然大悟の意にして明信佛智の了解の相なり信忍とは信心歡喜の相にして他力信心を獲得し成就滿足したる相なり忍とは忍可決定の義なりさて序分義と正信偈大意には喜悟信と玉ひ略

本には信喜悟と玉ひ序分義正信偈大意は經文の說相に依り玉ひ經文には心歡喜故應時卽得無生法忍と歡喜を初に擧げ玉へる故に喜悟信と玉ひ略本には韋提所得の三忍は願成就の他力信心の相なりと知らしめんが爲に願成就の信心歡喜の次第に列ねて信喜悟と玉へるなり○卽證法性之常樂とは當益なり此句は玄義分に捨此穢身卽證彼法性之常樂と玉へる文に依り玉へり卽は三忍を得ると同時に得涅槃と云ふに非らず所依の玄義分の如く穢身を捨てゝ淨土に往生すれば卽法性常樂の證を得ると云ふ故に略本には獲三忍の下に得難思議往生と一句を隔てゝ此句あり故に臨終捨命の夕には大般涅槃を超證すと云ふことなり法性とは涅槃の異名なり常樂我淨の四德を具せり其四德中常樂の二德を擧げて我淨の二德を攝し玉ふ凡夫に在りては四顚倒と名け佛に在りては四德と稱す凡夫は無常を常と執し苦を樂と執し無我を我と執し不淨を淨と執するが故に四顚倒と云ふ佛は此四德を實の如く證得して圓滿し玉へるなり今金剛心の行者も臨終捨命の夕には佛と同じく法性の常樂我淨の四德を證得すと示し玉へるなり

六依源信釋二初總述大綱

源信廣開一代敎　偏歸安養勸一切

源信僧都姓は卜部氏朱雀天皇天慶五年佛滅一千八百九十三年大和國葛城郡當麻鄉に誕生し玉ひ幼にして叡山に登り出家し良源上人を師とす學成りて橫川に隱れ寬仁元年六月十日に素懷を遂げ玉へり卽人皇六十八代後一條帝の時なり世壽七十有六歲なり此師をば楞嚴和尙と云ひ又慧信僧都と云ふ是れ橫川楞嚴院に在す故に楞嚴和尙と稱し又楞嚴院內の慧信院に住し玉へる故に慧信僧都とも稱す具には法華驗記續本朝往生傳元享釋書慧信緣起惠心院行實等披見すべしさて初二句は往生要集序に往生極樂之敎行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者但顯密敎法其文非一事理業因其行惟多利智精進之人未爲如予頑魯之者豈敢矣是故依念佛一門聊集經論要文と玉へる文に依り玉へるなり此二句をば和讃に本師源信チンコロニ一代佛敎ノソノナカニ念佛一門ヒラキテソ濁世末代ヲシヘケルと玉へると同じ廣開一代敎とは釋迦一代の敎法を披き覽玉へることを云ふ黑谷傳一に源信和尙一切經を五遍披

覽し玉ふと云へり○偏歸安養勸一切とは上句廣の字に對して偏と云ふ偏とは廣く顯密事理の一代教を開きつゝ其中より別して念佛一門を選び取りて自行化他の要術となし玉へるなり偏歸安養は自行なり是れ要集の序に利智精進之人未爲難如予頑魯之者豈敢矣と玉ひて顯密一代の教法は愚鈍之身には相應せず是れに由りて易行他力の念佛をば修して安養に往生すべしと自行の相を述べ玉へり勸一切とは化他なり是れ要集序に道俗貴賤誰不歸者と玉ひ又大尾には勸進衆生生極樂と玉ふ是れ末代の道俗貴賤に念佛一門を勸め玉へる化他の相を述べ玉ふなり是れ和讃の本師源空チンコロニ一代佛教ノソノナカニ念佛一門ヒラキツヽ濁世末代ヲシヘケルと玉へるものと同意なり

二別述要義二初判二修二土

專雜執心判淺深　報化二土正辯立

此二句は往生要集下末に問若凡下輩亦得往生云何近代於彼國土求者千萬得無一答乃至故經別說實不相違也と玉へる文に依つて因果對して得失を顯示し玉へり然るに所依の要集の文に問答三あり而して要は唯二なり第二問答は初答中に入て攝する故なり而して二問答は前後互顯して辯ず前は因に就きて果を判す因とは專雜の二修なり果とは十卽十生等なり後は果を擧げて因を辯ず果とは報化二土なり因は執心の牢否にあり大經中に信疑の別を以て胎化の優劣を釋す要集に因果對辯し玉へるは大經の意を顯はし玉ふなり眞佛土卷に夫按報者由如來願海等と玉へり然るに前答中に安樂集と禮讃とを引き和讃の專修は安樂集の三信雜修三不なり此れ第六祖の相承する所なる故に要集には處々に綽導兩祖を引き玉へり後答の中群疑論を引き玉へる意は兩祖に同じからず元祖聖人の師資之釋其相違甚多と玉へりされば彼論に衆生行業を以て因とし佛の本願力を以て緣と爲すが如き又如來の無漏土に依りて凡夫自心が土を變現して其中に生るゝと云ふが如きは豈是れ眞宗を知るものならんや然れども專雜報化を對辯するが如きは是なりされど彼論の大體より之を論せば未可なり故に祖師聖人は第六祖源信僧都を讃し玉へるに反て彼を取るを以て讃し玉へるなり故に高僧和讃には本師源信和尙ハ懷感禪師ノ釋ニヨリ處胎

經ヲヒラキテソ懈慢界ヲハアラハセル專修ノヒトヲホムルニハ千無一失とオシヘタリ雜修ノヒトヲキラフニハ萬不一生トノヘタマフ報ノ淨土ノ往生ハオホカラストソアラハセル化土ニムマルヽ衆生ヲハスクナカラストオシヘタリと玉へるは是れ所取の人を讃するに非らず能取の功を讃し玉へるなり○專雜執心判淺深とは群疑論に雜修の者は執心不牢固なるが故に懈慢界に生じ專修の人は執心牢固なるが故に極樂國に生ずと云へる意を述し玉へるなり專とは專修雜とは雜修なり此專雜二修は禮讃の上に於ては正行を修するを專修とし雜行を修するを雜修とす故に二行と二修は其體別なし其差別は正雜二行は行體の得失專雜二修は能修の機の得失なり是れ五祖は大判門なるが故なり此五祖善導大師を相承し玉へるが源信元祖の兩祖なり然るに祖師聖人は第五祖の意を探りて之れを細判し玉ひ正行の上に於ても專修雜修を分ち玉へり然るに第五祖の意は正雜二行は法の得失專雜二修は機の得失を示し玉ふ意なるが故に設ひ正行を修しても能修の機に自力の心を雜れば雜修の失を免れ難し故に祖師聖人は五正行幷べ修して往生淨土の因に廻向するを助

正兼行の雜修と名け玉ふ之れに由て今の專雜二修は要集の上に於て云へば專修とは念佛一行を修し雜修とは雜行を修することなれども若し祖師聖人の意に依れば他力廻向の大信心より等流して稱ふる念佛をば專修と云ひ設ひ稱名念佛すとも他力廻向の大信心なき者は專修雜心の雜修なり執心とは執は執持の義化卷に執言彰心堅牢而不移動也持言名不散不失也と玉へり判淺深とは執心に淺深を分つなり化卷に小經の一心に淺深を判し定散自利の一心を淺とし利他眞實の一心を深となし玉へり今は執心不牢固の自力心を淺とし執心牢固の他力信心を深と判し玉ふ○報化二土正辯立とは要集下末に是知雜修之者爲執心不牢之人故生懈慢國也若不雜修專行此業此卽執心牢固定生極樂又報淨土生者極少化淨土中生者不少故經別說實不相違也と玉へる文に依り玉へり所依の文に極樂國と云へるは彌陀の報土懈慢國とは彌陀の化土なりと報化二土を辯立し玉へるところなり然るに彌陀の化土と云へるは通途にて談ずる三身中の化身の在ます化土には非らず是れ報中の化なり要集下末綽法師云報佛報土等と玉へり道綽善導の兩祖は古今の諸師を階定して彌陀の

淨土をば唯報非化と判し玉へり故に要集に報佛報土の判を擧げて彌陀の淨土中に報化二土を分別し玉へりされば通途の化土に非らず報中の化なり祖師聖人是れを所依として眞佛土卷に夫按報者由如來願海酬報果成土故曰報也然就願海有眞有假是以復就佛土有眞有假等と玉ひて報中に於て眞假を分ち玉へり然るに要集に報中に於て化を立て玉へるは安樂集上に以相善力微但生相土唯覩報化佛也と玉へるを相承し玉へるなり報化佛とは報中の化佛と云ふことなり又定善義に雖得往生含華未出或生邊界或墮宮胎と玉へるも報中の化土の相也されば道綽善導の兩祖の上に報中に於て報化二土ありと雖も第六祖源信僧都の如く明に報化二土を辯立し玉はず然るに第六祖に至りて正しく報中に眞假を判し報化二土を辯立し玉はるが故に報化二土正辯立と玉へるものなり

二別明專修益二初示專修機

極重惡人唯稱佛

此句は要集下本の念佛證據門十文中第四觀經云極重惡人無他方便唯稱念佛得生極樂と玉へる文に依り玉へり此文甚だ至要なりされば要集良忠記七二十に或說曰後一條院御宇出離無疑往生指掌肝要明文可擇進之由諸宗勅之處異處同心而各進此文と云へり又能登國吼木山の眞言宗の寺に弘法天師眞刻の舟板の名號にも此文を彫れり彼舟板の名號には得生極樂をば定生極樂とありされば此文は第六祖源信僧都の始て唱導せられたるものに非らず既に弘法大師の時代乎若しくは其の以則より唱導せしものならん歟現流の要集には唯稱念佛とあれども元祖吾祖所覽の本には唯稱彌陀とありたるものならん故に黑谷傳及化卷所引皆唯稱彌陀と玉へりさて此文は觀經下々品の取意の文にして隱顯兩義中隱彰の實義を述べ玉へる文なり極重惡人とは下々品の唯知作惡の五逆十惡の惡人を云ふ北本涅槃九八十に犯四重禁及五無間名極重惡と說き玉へり四重禁とは殺盜婬妄なり五無間とは五逆罪なり唯稱佛とは下々品の具足十念稱南無阿彌陀佛と說き玉へる稱名念佛を云ふ唯とは簡持の義萬善諸行を簡去して口稱の念佛を取持すされど口稱の念佛とは云へども無信單行には非らず無上の信心に依止したる口稱念佛なりさて此文をば祖師聖人化卷に

按和尙解義念佛證據門中第十八願者顯開別願中之別願觀經定散諸機者勸勵極重惡人唯稱彌陀也と玉へり然るに要集の文は下々品の經意なるに祖師聖人は觀經の諸有定散の諸機を極重惡人唯稱彌陀と勸勵し玉へる文と玉へるは無他方便と玉へる文より出たる釋意ならん方便とは四敎儀集註上十九に方法也便用世善用其法逗會衆生亦善巧之謂也と云へり是れ衆生の機に應ずる樣に手を換へて法を與ふるを云ふなりされば極重惡人無他方便と云ふが觀經の諸有定散の諸機を下々品に追ひ籠めて機を信せしむる文と見玉へるなり何となれば觀經は定散の諸機を誘引して第十八願に引入せんが爲めの經なればなり故に最初より第十八願に入り兼ぬる機の爲に定散の機に對して定善十三觀散善三福を說き玉へども煩惱賊の爲めに害せらるゝ凡夫なれば定散の諸行を修すること能はず之れに由りて下々品に來りて定散の諸機が追ひ詰められて極重惡人と機を信ずるより外なし是れ卽ち無他方便の狀態なり然るに定散の諸機何れも極重惡人にして無有出離之緣と知られたなれば偏へに彌陀を稱すべしと第十八願に引入せしむることを得るなり故に化土卷に觀經定散の諸機を該して極重惡人唯稱彌陀と勸勵し玉へりと玉へるは是れ此の謂れあるが所以也

二正明得益

我亦在彼攝取中　煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我

此三句は要集中本に雜略觀を明し玉へる中に觀經の光明遍照の文を引きて次に我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見大悲無倦常照我身と玉へる文に依り玉へり○我亦在彼攝取中とは我は第六祖自らを指し玉へる言なり亦は他の念佛行者に對する言なりされば彌陀の本願を信じ念佛せる衆生は皆悉く彌陀攝取の光明界裡に住む身なり故に我も亦彌陀の本願を信ずる念佛の行者なるが故に彌陀の攝取の光明界裡に在りと示し玉へるなり攝取の光明は旣に上に辯ずるが如し○煩惱障眼雖不見とは煩惱具足の凡夫なれば煩惱の爲に內眼障导せられて彌陀の光明を拜むこと能はざるなり雖とは得失を兼ぬる言なりされば雖の字は煩惱障眼の上に在るべき文

字なれども要集の文は四字一句に造り玉へる故に煩惱障眼雖不能見と雖の字を置き玉ふ今此偈は要集の文を直に出して七字一句となし玉へる故に煩惱障眼雖不見と玉へり○大悲無倦常照我とは大悲とは攝取の光明を云ふ是れ觀經の以無緣慈攝諸衆生と說き玉へり攝取不捨は彌陀の大悲心を以て念佛衆生を護念し玉へるとなれば今攝取の光明をば大悲と玉へり無倦常照我とは倦は疲倦の義にして佛の大悲心は暫くも疲倦し玉はず常に我身を照護し玉ふなり又云く倦怠の義論語述而篇に默而識之學而不厭誨人不倦何有於我哉と云へり刑昺疏に學古而心不厭敎誨於人不有倦怠と云へりされば佛の大悲心は倦怠なく常に吾人を照護し玉へるなり我とは第六祖自から指し玉へる言なり和讃に煩惱ニマナコサヘラレテ攝取ノ光明ミサレトモ大悲モノウキコトナクテツネニワカ身ヲテラスナリと玉へると同意なり同所依之は雜略觀中に在り今上句に連ねて稱名の益となし玉へるは相違に非らずや答此文至要なり師の安心攬て觀るべきものは特に此言にあるに依るなり信卷本に此文を引きて二河譬喩の中に應じ和讃は證據門の初に次ぎて之れを讃じ玉へり當知

雜略觀中に在りと雖も實は是れ念佛の益なり何を以ての故に念佛是れ佛隨自意の行にして傳持する所の宗要なり觀は則隨他意にして終に所廢の故に經文の正意選擇集攝取章に疏を引きて釋し玉へるが如しされば極略中稱名の處に在りて出すべきなり然るに念佛の言寬通明ならず第六祖源信僧都叡岳にまします故に恐慮し玉へる所多し是以て斷じて稱名なりとなし玉へること得ず例へば十念の舊釋不同觀と爲し稱と爲し然るに臨終行儀及臨終念相の中には稱と爲す者を以て判じて文に順せるとなし然るに念佛證據門の初に十文を引き其後の料簡には稱名と爲すは覺小二經と皷音聲經として本願に及ばざるが如し今亦如此夫れ眞身の光明は別願に酬報す別願は正しく稱名の行者に被るなり眞身光明若し觀行を攝すと云はゞ因果成せず是以て光照は唯是れ稱名のみ世尊特に持名を付屬し玉へる所以なり是れ智者の能く知る所なり第六祖豈惑んや知て而して知ざるが如くなし玉へるは其時を得ざるが爲めのみされば祖師聖人第六祖の意を得て雜略觀中の文意を稱名の後に出し玉へるなりさて此一段は第六祖の攝取の光明界裡に在りて照護せらるゝこと

を喜び玉へる意を述べ玉へるものなり

七依源空釋二初嘆師德

本師源空明佛敎　憐愍善惡凡夫人

第七祖法然聖人は漆間氏崇德天皇の長承二年四月七日美作國久米郡稻岡庄に誕生し玉ひ父の遺志に從ひ菩提寺の觀覺に隨ひ出家し十五歲に叡岳に登り學成りて黑谷に隱れ後吉水に出でゝ淨土眞宗を弘通し玉へり建永二年御年七十五歲にて念佛停止の法令の下に南都北嶺の强訴に依り土佐國幡多に遷され居ること五十年建曆元年勅免歸洛し玉ひ越て二年正月二十五日素懷を遂げ玉へり具には拾遺古德傳十六門記鎭西の黑谷傳西山三河の法藏寺傳等を披見すべしさて此二句をば六要鈔には悲智の二德を擧げて元祖の德を讃嘆し玉へりと釋し玉へり初句は智德後句は悲德なり○本師源空明佛敎とは源空は師の諱名坊號をば法然と申し奉ること古德傳二に出たり佛敎とは一代佛敎なり明とは曉也と訓じてアキラムルと云ふことなり故に略本偈には源空曉了諸聖典と玉へり師は天台を皇圓に受け密乘梵網を叡岳に

受け三論俱舍成實を寬雅に受く唯識を論じて藏俊驚歸し雜華を說きて慶雅舌を吐く終に黑谷の報恩藏に入りて一代經を披覽し玉へること五遍觀經の疏を閱すること八遍に及べり是れ元祖聖人の明佛敎の相なり○憐愍善惡凡夫人とは元祖聖人上の如く一代經を明らめ玉へるものも又諸宗の奧義を究め玉へるものも豈に他あらんや唯善惡の凡夫人を憐愍して出離の要路を求め之れを知らしめんが爲のみ其善惡凡夫人を憐愍し玉へる相は善人は自負し惡人は自棄す共に生死の迷界を出ること能はざるは彌陀選擇本願を知らざるに由るなり故に彌陀選擇本願他力眞宗の玄意をば選擇集一部に顯はして之れを示し玉へり若し選擇集を異せば速欲生死等の十六句なり卽ち聖道門を捨てゝ淨土門に入り淨土門の中雜行を捨てゝ正行に歸し正行中助業を傍らにして正定業を專らにし時機相應の要法たる易行易修の他力本願の念佛一行をば修して生死の迷界を出離すべしと敎へ玉へるが卽ち是れ憐愍の相なり

二正述釋義二初明開宗弘化

眞宗教證興片州　選擇本願弘惡世

此二句は選擇集の前三章の意に據りて眞宗念佛の弘化を顯はし玉へるなり向に第六祖源信僧都ありて念佛の法を弘通なし玉ふと雖も自ら天台に居して未だ一家を成じ玉はず第七祖法然聖人に來りて時機純熟の運に乘じ聖道門の外に淨土一門を別立し玉へるが故に開宗の功勳第七祖にありと示し玉へり故に和讃に本師源空世ニイテ、弘願ノ一乘ヒロメツ、日本一洲コトノ〳〵ク淨土ノ機緣アラハレヌ智慧光ノチカラヨリ本師源空アラハレテ淨土眞宗ヒラキツ、選擇本願ノヘタマフ等と玉へり眞宗とは散善機及五會法事讃に出たり然るに彼の二聖敎の眞宗は宗名に非らず弘願の念佛をば眞宗と云へるのみ今此偈の眞宗は宗名なり宗名は一家の要論なれば是を論せんさて宗名の義趣を辯ずるに初に開宗の始末を辯し次に宗名の義趣を辯じ後には異名の得失を辯ず初に開宗の始末とは眞宗實璽傳に（編者不詳）依るに淨土眞宗の宗名は後白河法皇の文治二年八月圓頓戒を黑谷上人より授り玉ふ因て淨土眞宗開闢弘通の宣命を賜ふ空上人五十四歳の御時なりその宣命云

先帝後白河法皇本願

今上後鳥羽聖皇在位

宣命　先代和朝東漸之淨土眞宗於吾國宜開宗者天氣如是墨

文治第二丙午歳八月三日　　右少辨在判

法然房

爰に太上天皇後鳥羽院今上土御門院聖曆承元丁卯年仲春の頃南北の衆徒の憤り奏せしに依て三月十六日卯の一天配流せらるゝべき由宣命あり十四日の夜善信上人ひそかに岡崎をしのびいでゝ法性寺小御堂へ御暇乞に入來ましまゝければ空上人一宗弘通の勅書を授與し玉ふ大師聖人御添書云

コヽニ去ル頃戴キシ勅命ハツカノマモ身ヲハナタサル淨土眞宗弘興ノ寶璽タリ今夜ヒソカニ貴坊ニ授與セントオモフアヒタ子カハクハ予カ滅後貴坊カハリテ此一宗ヲ弘通シ玉フヘシアナカシコ〳〵

承元丁卯年三月十四日　　源空在判

是れに依て見れば淨土眞宗の名は第七祖聖人既に勅許を蒙り玉ひ以て祖師聖人に
これを讓り玉へるなり故に此偈和讃に開宗の功をば第七祖聖人に歸シテ淨土眞宗
ヲヒラキツヽ選擇本願ノヘタマフと玉へり御文にも開山ハ淨土眞宗トコソ定メラ
レタリと玉へり是れ正しくその開宗の顯相に就きて是れを玉ひしものなるべし龜
山帝の勅宣に親鸞聖人同淨土眞宗引導凡俗と云云其意亦同若しその義に就き之を
論せば本願固有の淨土眞宗にして大無量壽經卽是淨土眞宗なり故に敎卷に大無量
壽經眞實之敎淨土眞宗と玉へり第七祖聖人の宗とする所亦唯是れより外なし故に
祖傳にはカタシケナクモ三國ノ祖師オノ〳〵コノ一宗ヲ興行ス愚禿スヽムルト
コロ私ナシと玉ひ又略本には論家宗師開淨土眞宗導濁世邪僞と玉ふ淨土の二字は
第四祖聖人に初て此名を立て眞宗の二字は第五祖聖人始て此名を立て玉ふ四字を
以て宗名を云つることは第七祖の聖敎にも未だ之れを見ず七祖の開宗第七祖の勅
許にして吾が祖師聖人の大成し玉へるなり次に立名義趣を辨せば初に離釋後に合

釋初中初に淨土眞後に宗初中亦二一淨土二眞淨土とは一に淨因所建の土なるが故
に淨土と云ふ論註に此二種莊嚴成就由法藏菩薩四十八願等淸淨願心之所莊嚴因淨
故果淨と玉へり二に淨人所住の土なるが故に淨土と云ふ淨土論に正覺阿彌陀法王
善住持と玉へり三に相超三界故に淨土と云ふ論に觀彼世界相勝過三界道と玉へり
四に體順法性故に淨土と云ふ論註に此淨土隨順法性不乘法本と玉へり初の二は佛
に約して土を辯じ因果二力彼土を成持す故に淨土と名け後二は直に土體に約す體
相淸淨の故に淨土と云ふ四義具足して名けて淨土といふ是れ所期に就く今は所期
を以てこれを所宗に名く往生淨土の法門を名けて淨土とす是れ聖道に對する名な
り眞とは眞實にして方便に對する名なり卽ち第十八願所誓の法を指して眞實と云
ふ宗とは宗旨なり六要鈔一は總而言之廣於佛敎立眞宗名又非所遮圭峰盂蘭盆疏云
良由眞宗未至周孔且使繫心靈是同新記釋之云眞宗卽佛敎依此義邊五會之宗所立之
名又無所限通別兩意並可存之但眞宗名於念佛門殊有其理大經說爲眞實之相眞實宗
旨其義可知と玉へり後に合釋せば披するに淨土の目三願眞假に通じ又眞の言汎く

佛教に通ず然り而てて上下互に簡で以て今の別名を成す一は以上簡下二は以下簡上なり以上簡下では眞の言汎く聖淨に通す今聖道の眞宗に簡で浮土の眞宗を取る故に淨土眞と云なり次に以下簡上とは淨土の中に眞實あり方便あり淨土の言汎く眞假に通ずその方便を簡で眞實を取るが故に淨土眞と云ふ淨土眞に依るの宗なるが故に依主得名他の天台宗の山に依りて名け華嚴宗の經に依りて名け日蓮宗の人に依りて名く此等に簡で法義に就きて淨土眞宗と稱するなり又淨土卽眞淨土眞卽宗なるが故に持業得名也選擇集末燈鈔等に淨土宗と玉ひ又處々に唯眞宗と玉へるものは是れ略のみ然るに茶店問答辯訛に四箇大乘宗みな眞宗なれども勅命を以て眞宗と稱すべき綸旨なし淨土宗には後陽成帝觀智國師に勅して緣山を勅願所と定め眞宗弘通すべしとの綸旨を賜ふ其外大樹寺にも眞宗弘通の綸旨ありこれこの勅命より自他共許して只眞宗とも云ふ云云せり是れ第十八願を指して眞宗と稱するものにして宗名とするに非らざるなり後に異名得失を辯ぜば同一向宗の名は誰か始てこれを淨するや又其得失如何答一向宗の名所又未だ詳かならずと雖も西譽淨

士佛祖集に善信空師瀉瓶之御弟子傳承奥義不云淨土宗云一向宗也と云ひ又略頌に親鸞法橋一向義と云へり然れば淨土宗より眞の字を加へて淨土眞宗と稱するを忌て呼ぶ所なりと見へたり然るに帖外御文の文明五年九月下旬の章には夫當流ヲ一向宗トワカ家ヨリモ他宗ヨリモソノ名ヲ一向宗トイヘルコトサラニコヽロエカタキ次第ナリ祖師聖人ハ淨土眞宗トコソオホセ定メラレタリ他宗ノ人一向宗トイフコトハ是非ナシ當流ノ中ニワレトナノリテ一向宗トイフコトハオホキナルアヤマリナリマツ當流ノコヽロハ自餘ノ淨土宗ヨリスクレタル一義アルニヨリテワカ聖人モ別シテ眞ノ字ヲオキテ淨土眞宗トサタメ玉ヘリツフサニイヘハ淨土眞宗トイフ略シテハ眞宗ト云ヘキナリと玉ひ又延德二年の帖外御文に抑當流ノ名ヲ自他宗トモニ往古ヨリ一向宗ト號スルコト大ナルアヤマリナリ更ニ以テ開山聖人ヨリ仰セ定メラレタルコトナシ殊ニ御作文ナントニハ眞宗トコソ仰セラレタリ而ルニ諸宗ノ方ヨリ一向宗トイハン不足信用アマツサヘ當流ノ輩モ我ト一向宗トナノルナリ夫一向宗ト云ハ時宗方ノ名ナリ一遍一向是ナリ其源ハ江州番場ノ道場是則一向

宗ナリ此ヲヘツライテ如此云一向宗歟是言語同斷ノ次第ナリ既ニ開山聖人ノ定メマシマストコロノ當流ノ名ハ淨土眞宗是也法然聖人ヨリ直ニツタヘマシマス宗ナリ是故ニ當流ヲハツフサニ云ハン時ハ淨土眞宗ト云ヘシ略シテ眞宗ト云ヘシ乃至所詮自今已後當流ノ行者ハ一向宗トミツカラナノラン輩ニ於テハ永ク不可當流門下者也と玉へり又御文一帖目十五通に問テイハク當流ヲミナ世間ニ流布シテ一向宗トナツケ候ハ乃至一向ニ無量壽佛ヲ念セヨトイヘルコヽロナルトキハ一向宗トマウシタルモ子細ナシサリナカラ開山ハコノ宗ヲハ淨土眞宗トコソサタメタマヘリサレハ一向宗トイフ名言ハサラニ本宗ヨリマウサヌナリトシルヘシ等と玉へり是れに由て之れを觀れば吾が祖師の定め玉はざる所の宗名を末徒にして是れを稱したるものは甚だ非なりと謂つべし然りと雖も一向宗と申したるも子細なしと玉へるものは是れ他人貶して呼ぶ所の名なれども却て美稱となる元祖聖人の開宗和尚の一向專念を以て宗の所詮とす故に廢助傍の三義中初を以て正義となすと決し玉へり然れば第五祖と第七祖元祖聖人の正意一向專念に在り是以一向宗の名別して我宗を名

くるもの却て美稱とすべし例せば佛をばホトケと訓するもの貶稱ナリと雖も却てその德を顯はすが如し故に與へて子細なしと玉へるなり然りと雖も淨土眞宗の目能く假を簡びて眞を顯はし更に濫なき淨土眞宗とは其義雲泥敎證とは具には敎行證なり化卷に聖道諸敎行證久廢淨土眞宗證道今盛と玉へり是れ末法には聖道の諸敎は敎のみありて行證なり此の時季に當り第七祖法然聖人出世し玉ひて淨土の敎行證を興隆し玉へりされば化卷に對映すれば敎行證なりと云ふて可なり次句に選擇本願と云へば是句に行を示し玉へるが故に敎行證中の行を取り出し玉へるが故に敎證の二と見るも可ならん歟然るに選擇集所明の概要は四法建立に非らずして行中攝信の敎行證の三法門の所明なりされば敎相章は敎を明し二行章には行を顯はし本願章以下には其義を成立して其中に往生淨土の證果を明し玉へるなり然るに敎行證の三法より初句に敎證となし玉へるは天台等に敎證二道を云ふて敎道を方便とし證道を眞實とし權大乘に佛果を云へども果頭無人なり果頭無人をば佛果に人あるが如く說くを敎道なり證道にては權大乘の佛果は其名のみありて其人な

しと談し佛果は唯一乘のみと云へるに由りて末法には聖道門は敎のみありて行證なく彌陀の本願一乘法は敎行證の三法は萬年法滅の時季までも盛なること恰も聖道門は敎道の如に方便にして實證なく淨土眞宗は證道の如く眞實にして實證ありと示し玉へる意なり又後に行を出し玉へるは選擇集の要なるが所以なり集の初に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と要を提出して行を示し玉へる故に今此偈に其要を示して選擇本願弘惡世と玉へるなり興片州とは片は木片と註し片洲とは木の片の如き小國と云ふことにて日本の群嶋を喩へ玉へるなり然るにことさら片州と玉へる意あり和讃に片州濁世と玉へるは元祖聖人出世の德を知らしめん爲ならん大國にして上代なれば高僧の出世もあるべし時を云へば濁世末代處を云へば粟散片州の嶋國なれば第七祖法然聖人の出世なくば弘願一乘の他力本願をば聞ことを得んやと示し玉へる意なり興とは興隆なり○選擇本願弘惡世とは選擇本願とは具に選擇本願念佛と云ふべし是卽ち彌陀如來の廻向し玉へる眞實の大行なり選擇は旣に上に辯ずが如し本願とは本謂く根本にして枝末に對するなり第十八願を以て根本とし餘願を以て枝末とす故に特留章には凡四十八願皆雖本願殊以念佛爲往生規故誓多門四十八偏標念佛最爲親人能念佛佛還念專心想佛佛知人已上故知四十八願之中卽以念佛往生之願而爲本願中之王也と玉へり弘惡世とは五濁惡世に弘通し玉へるを云ふなり

二明信疑決判

還來生死輪轉家　決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂　必以信心爲能入

是の四句は吾が祖師聖人化卷後序に眞宗簡要念佛奥義攝在于斯と玉へるは選擇集三心章の當知生死之家以疑爲所止涅槃之城以信爲能入故今建立二種信心決定九品往生者也と玉へる文なり彼の西山流祖たる證空鎭西流祖の聖光毘舍門堂の隆寛勢觀房源智皆是れ見寫の徒なり就中善惠坊證空は證義勘文の輩なりと雖も其の眞意那邊に在るを知らず信空聖覺二師直傳之人ならんも未だ眞傳を見ずされど妙に吾が祖師職人と合ふ是れ元祖聖人の眞意那邊に在るを知れる師なり祖傳の信行兩座

の段の如しされば其の眞意他に非らず元祖聖人の行を玉へるものは必可具三心の行にして相對し玉へると雖も正しく往生の得不を論じ玉へるときは絶待の故に信を以て之れを談じ玉ふなりされば其の骨髓を得玉へるは祖師聖人が元祖聖人御面會のとき宗の淵源をつくし敎の理致をきはめてこれを述べ給へることは祖傳に示し玉へる文意ならん歟故に和讃に源空智行ノ至德ニハ聖道諸宗ノ師主モミナモロトモニ歸セシメテ一心金剛ノ戒師トスと玉ひ又諸佛方便トキイタリ源空ヒシリトシメシツ、無上ノ信心オシヘテソ涅槃ノカトヲハヒラキケルと玉へるより考へ祖傳の信行兩座信心諍論の二段を見れば元祖聖人の眞意那邊に存ずるかを知るを得べし若し此八句二偈を見ても四句一偈は開宗弘化の相と見るが正にて結尾に弘惡世と玉へるもの是れ弘化の相に非らずして何ぞや後四句一偈こそ選擇集の眞意を明して元祖聖人より親授せられたる宗の淵源敎の理致をば赤裸々に發表し玉へるものと見るべしされば和讃に對照すれば諸佛方便トキイタリ源空ヒシリトシメシツ、無上ノ信心オシヘテソ涅槃ノカトヲハヒラキケル眞ノ知識ニアフコトハカタキカナカニナヲカタシ流轉輪廻ノキハナキハ疑情ノサハリニシクソナキの二首と今の四句と同意なり諸佛等と云へば敎の理致に非らずや凡夫得生は宗の淵源に非ずやされば選擇集の題下に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と玉へるが故に念佛爲本は否定すべからずと雖も是の念佛爲本の聖道の諸宗に對するが故に法に約して談じ玉へども正しく機の趣入に約して機の領受より論ずれば必可具三心の信を以て旨歸とすべしされば念佛の奥義なるものは此三心章信疑決判の文と云ふべしされば信疑決判は一家の要論なれば詳論は選擇集に讓り今は此判を設け玉ひし所由を辯ぜん問此判を設け玉へる所由如何答二義あり一爲令知念佛奥義故二爲令達信心爲本故三爲令仰横超之因果故四爲令得平等一味之大信故一に爲令知念佛之奥義故とは化卷に眞宗簡要念佛奥義提在干斯と選擇集の簡要は眞實四法なりと雖も要中要奥義中奥義たるは此信にあり選擇集は廣く念佛を明し玉へる其中間に在りて念佛行者必可具足三心を標して經釋の之を引き私釋に三心は要を取り詮を簡べば一深信に攝することを明す故に吾語燈一に三心ハマチ〳〵ニワカレタリトイヘト

モ要ヲトリ詮ヲ攝フテコレヲイヘハ深心ニ攝メタリと玉へり此れ正く能入の一心なり此信に就きて信疑決判す實に念佛奥義なるものなり其旨偏く一部に渉て論ずれば第一章捨標歸淨も第二章の捨雜歸正も第三章の選擇稱名此信に依らざれば眞なること能はず四章已下の諸章も亦同じ故に此判念佛の奥義を知らしむこと應知要を以て之を云へば信は法體を全領し其法體全領の信等流して口に形はれたるが故に聲々法體なれば念々是れ無上功德當果に望むれば唯是彌陀願行の自ら運ぶものなり故に十聲聞已も必ず得生す若し此信を具せずば百千萬億聲も千中無一なり故に和語燈二に問念佛マフスヒトハミナ往生スベキヤ答他力の念佛ハ往生スヘシ自力ノ念佛ハ往生スヘカラス問ソノ他力ノヤウイカン答唯ヒトスチニ我身ノ善惡ヲカヘリミス決定往生セントオモフテマフスヲ他力ノ念佛トマフスナリと玉へり然れば念佛の自力往生の得否は信心の有無による然る所以は散善義三心釋の結文に三信既具無行不成願行既成若不生者無有是處也と聞信一念に法體を全領して業事成辯す又盡形壽の稱名を該攝して稱名と成じてあり信も行も南無阿彌陀佛其法體が選定の業因信も行も法體より論ずれば唯彌陀願行のあらはれもてゆくものにして相續の稱名は是れが露現する所なり法體より提れば念佛卽南無阿彌陀佛にして正定業なり機より云へば信爲能入能稱の當相に就けば相續作業念佛全く法體にして業因ならしむるも能稱を募らず報恩行とならしむるも偏に此信に依ると知るべし二に爲令達信心爲本故とは選擇集は念佛爲本にして行具の三心なり行具の三心とは和語燈七に一向ニ念佛シテ疑ヒナク往生セントオモフハ行具ノ三心ナリと玉へり然るに此信疑決判にては殆ど信心爲本の勢なり何となれば念佛爲本は修入の行に正雜二行を立て一廢一立する相對なり今此信疑決判は絶待の法門にして修入の法は唯信心のみされば此判は大經の信疑得失を承け來りて淨穢相對して信疑を決判し六趣四生二十五有に止むるものを一疑惑とす其所以は六趣四生二十五有各々業に由て昇沈するは理の常なり然るに疑情除けば此業六趣に止らず願力轉じて涅槃界に入らしむ但に分段生死のみならず變易生死も此に攝して疑心除くときは大小聖人も各々の業果に止らず頓に眞佛土の妙果を究む六趣生死大小聖人人天の

果に止まりて妙果に至らざるは唯疑情の所止疑情除けば善惡皆轉す行卷一乘海釋に從久遠已來轉凡聖所修雜修雜善川水轉逆謗闡提恒沙無明海水成本願智慧眞實恒沙萬德大寶海水と嘆じ玉へり此一疑惑除けば九界の善惡一切轉成すそこで生死に止む所のものは一疑惑なりとし之れを所止と決し此疑惑全盡すれば速に涅槃の城に入る故に信爲能入と判す實に一乘眞實の利益なり祖師聖人相承の骨髓全く爰にあり故にヨキヒトノオホセヲカフムリテ信スル外別ノ子細ナシと玉へり此是の念佛爲本の相對門常に信心爲本の絶待門をはなさゝるが故に其所承如此問信疑決判やはり行具の信往生の業たる義にして往生之業念佛爲本の義ならん何ぞ信心爲本に歸すると云ふや答此信を以て念佛に具せしむれば然るべし三心章の標其意なり今具せられたる信を取出して信疑決判する當分にては何ぞ信心爲本に歸せざらんや元祖聖人の一願建立吾が祖の五願開示と同致なることを得るは此文なり元祖聖人の上に既に信心爲本に歸する義あるが故に祖師聖人相承して其義を詳にし玉へり祖師聖人何ぞ私創せん此文的切に信疑決判す何も當相行具の信と云はん一部の

部旨より論ずれば行具の信なり雖も所止の疑に對すれば所具の信表に立て信行を全して信疑對の法門を成す眞實信心必具名號の義勢也然らざれば行疑對にては相對成ざるなり此是の相對極て絶待に歸るなり何ぞ聖道一代より要眞二門諸有の法門疑を所止とし信を能入の因とすること絶無なり唯是れ願海自爾の法門にして第十八の本願に局る實に信心爲本を產み出すの要文なりと謂つべし三に爲令仰横超因果故とは深信は横超の因なり涅槃は横超の果なり云何力横超なる云く果內迷倒の處をば生死の家とし界外極樂を涅槃城とす横に二種生死を超へて涅槃極果を超證す故に大經には必得超截去等と說き玉ひ唯信文意にはコノ信心ハ横超ノ信心ナリ等と玉へり今迷悟は唯信疑に依るのみと決判し嚴に疑の障りなることを示し明に信心の因なることを嘆じ玉へるは横超の因果を仰信せしめん爲なり四に爲令得平等一味之大信故とは信疑決判して直ぐ次に建立二種信心決定九品往生と二種深信を出し玉へり是れ判意は平等一味の大信を得せしむるにあり疏の深信釋其文義廣博にして其旨歸辯し易からず元祖聖人信疑決判して平等一味の大信なる義を立

てゝ二種深信を引きて有緣をして平等の信を得せしめ玉へるなりされば此深信は疑を去り究竟して往生を得る弘願眞實の信樂一心中の二二而不二初の信は自力を捨ることを顯はし後の信は他力に歸することを示すなりされて此二種深信は元觀經の九品の機を一下々品に攝して上六品の機は善を募らず下三品の機は惡を恐れず善惡の諸機をして一味の信を得せしむる爲めの釋なり此釋を出し玉へるものは平等一味の大信を得せしむるにあること明なりされて今此偈を解さは初二句は生死の因果を明後二句に涅槃の因果を示し玉へるなり○還來生死輪轉家とは生死の果なり生死輪轉家と云ふは論上に生死凡夫流轉之闇宅と玉へり是れは二種深信の曠刼以來常沒常流轉と玉へる相なり生死とは翻譯名義集に梵云闍提闍五蘊初起名之爲生勝鬘云生者新諸根生死者故諸根滅と云へり生死を唯識論等にて云ふ分段變易の二種生死中の分段生死なり銘文に當知生死之家トイフハマサニシルヘシ生死ノイヘトイフナリ以疑爲所止トイフハ大願ノ不思議力ヲウタカフコヽロヲモテ六道四生二十五有ニトトマルイマニマヨフトシルヘシと玉へり輪轉とは論註上に見三界

是虛僞相是輪轉相是無窮相如釈蠖循環と玉へり心地觀經三に有情輪廻生六道猶如車輪無始終と說き玉ひ止觀一に善惡輪環と云へり弘決に之れを解して善通非想惡極無間昇而復起故名爲輪無始無際喩之如環と云へりされば輪は車輪轉は廻轉車輪の廻轉して始終なきが如く三界六道を死此生彼と迷ふ相を喩へて輪轉と云ふ家は居なりと住して住處を云ふ三界六道を迷ひの住處とすることを顯はして家と云ふ還來とは往還去來にして三界六道の間を往きつ戻りつ迷へる有樣を云ふ○決以疑情爲所止とは生死の因なり決は決判なり疑情とは疑惑情識を云ふ疑ひの心なり此疑情とは通途の疑煩惱のことに非らず不了佛智の疑惑のことにして自力の迷心是れなり故に銘文に大願ノ不思議力ヲウタカフコヽロヲモテ六道四生二十五有ニトヽマルナリと玉へり愚痴無明を以て生死の本源とするは通佛敎の所談なり佛智を疑惑するを以て生死の本源とするは淨土の別途不共の義なり所止とは止まる所と云ふ卽ち生死の家は所止の處疑情は能止の因されば以疑情爲能止と云ふべき處なるを能止と云はずして所止と玉へるは次に必以信心爲能入とある能入の言に對し

て一偈中に能字二つとなりて繁重を恐るが故に能止と云はずして所止と云ふ所止は能所相對の所に非らずして助字なり四教儀集註下所卽助字と云へると同意なり然れば還來生死等の二句は生死を流轉する因は疑ふべからざる彌陀大悲の本願を疑ふ心なりと決判し玉へるなり速入寂靜無爲樂とは涅槃の證果なり速入とは上の還來の言に對す速は速疾入とは證入なり寂靜無爲樂とは選擇集に涅槃之城と玉へるを句を成せんが爲めに定善義の西方寂靜無爲樂と玉へるを取り玉へり大經には無爲自然と說き玉ひ法事讃は極樂無爲禮讃には三昧無爲卽涅槃と玉へり寂靜と云ふも無爲と云ふも涅槃の異名なり北本涅槃三十三二十一に涅槃の異名を擧ぐる處に亦名無爲亦名寂靜と說き玉へり眞佛土卷に引用し玉へるが故に披見すべし寂靜とは涅槃は煩惱等誼雜を離れて安穩なるを云ふ無爲とは涅槃は爲作造作を離れて常住不變なるを云ふ樂とは定善義の上に於ては涅槃の四德中の樂德なり北本涅槃二十三二四に以大樂故名大涅槃と說き玉へり然れども祖師聖人は樂字をミャコと訓し玉へり所依の涅槃之城を寂靜無爲樂と換へ玉ふ故に樂は洛と同音なればミャコ

と讀み玉へるなり廣韻に樂は洛也と註せり○必以信心爲能入とは涅槃の因なり必は必定なり信心とは他力廻向の大信心なり爲能入とは寂靜無爲の淨土を以て所入處とし他力廻向の大信心を以て能入の因とすることを示し玉へるなりさて此四句は生死の因果も涅槃の因果も共に果を前にし因を後にし玉へることは苦集滅道の四諦の理を明す次第に准し玉へるもの歟

三結嘆勸信

弘經大士宗師等　拯濟無邊極濁惡

道俗時衆共同心　唯可信斯高僧說

初二句は結諸祖後二句は勸時衆○弘經大士宗師等とは總じて前の所明の七祖を指す卽ち佛經を弘通し玉へる大士宗師と云ふなり弘經とは七祖皆大聖世尊の所說の經を弘め玉へる故に弘經と云ふ大士宗師とは大士は菩薩の異名龍天の二祖を指し宗師とは鸞師以下の五祖を指す有說に總じて四字共に七祖を指す故に化卷本に四依弘經大士三朝淨土宗師開眞宗念佛導濁世邪僞と玉へりと云へり是說是なるに似

たり等とは勦説に二釋あり內等と齊等となり內等とは瑜伽論記二下十六に等有二種一者向內等二者向外等也と云へる向內等なり向內等とは外に等取すべきものなしと雖も其處に多くの法を列ねたる時に夫れを統攝する爲めに等字を置くなり今は西天には龍天の二祖あり中夏には鸞綽導の三祖あり日域には信空の二祖あり故に夫れを統攝する爲に等字を置き玉へり齊等とは西天の二祖中夏の三祖日域の二祖齊しく此の彌陀本願の妙法をば弘傳し玉へるを云ふなり私に思ふ齊等の義を是とす略本の頌に論說師釋共同心と玉へるより見れば齊等を以て解すべきなりさて此一句は依經分の敎說をば依釋分の七祖相承して之れを弘通し玉へるなりと結び玉へるなり是れ偈前の文に歸大聖眞言閱大祖解釋作正信偈と玉へる意なり○拯濟無邊極濁惡とは此句は三朝の七祖大聖の眞言を弘傳し玉へるものは他なし唯是れ無邊の衆生を救濟せんが爲めのみと顯はし玉ふ此句の所依は大經序分には拯濟無極と說き玉ひ如來會下に拯濁世と說き玉ひ安樂集上に爲盡無邊生死海故と玉へり無邊とは無邊の生死海に沈沒することを顯はす或は云ふべし七祖の拯濟し玉へるところの衆生無量無邊なることを顯すなりと極濁惡とは其の無邊の衆生が悉く濁惡の衆生のみなりと明し玉へり是れ七祖は像法末法の時運に出世し玉へば五濁惡時惡世界の衆生なるが故に極濁惡と玉へり極濟とは慧琳音義一七に極助也濟度也益也と云へり然れば此二句は七祖相承の意を結し玉へるなり道俗時衆共同心とは玄義分に道俗時衆等と玉へり道俗とは銘文本に道俗ハ道ニフタリアリ俗ニフタリアリ道ノフタリハ一ニハ僧二ニハ比丘尼ナリ俗ニフタリハ一ニハ佛ノミノリヲ信シ行スル男ナリ二ニハ佛ノミノリヲ信シ行スル女ナリと玉へり是も實の道俗と云ふ時は五戒五百戒を持つ者のことなれども今は無戒名字の道俗にして剃髮染衣の者を道とし在家の者を俗とす唯是れ形の上に就きて之れを分つのみ時衆とは其ときどきに集まれる大衆のことにて道俗を指して時衆と云ふ共同心とは一切の道俗もろともに心を同一にしてと玉へるなり○唯可信斯高僧說とは散善義に唯可深信佛語專注奉行と玉へり唯とは上來所明の七祖の外を簡ぶ斯高僧說とは依釋分に明すところの七祖の說を指すなりされば淨土門の祖師多しと雖も餘の高

僧の說を簡去し唯此の七祖の說を信ずべしと示し玉へるなり上の依經分には應信如來如實言と勸信し玉ひ今亦終に於て唯可信斯高僧說と勸信し玉へり然れば正信偈の大意を論ずれば行信二法なりと雖も其の旨歸を論ずれば他力廻向の大信心を我身に受得せよと勸進し玉へるなり上來略して正信念佛偈を辯ず正信偈は實に甚深の寶典なり予は至りて寡聞淺識の輩たり予が此の寶典を講ずることは恰も漠々なる蒼天をば管を以て是れを闚ふに似たり實に恐懼の至なり唯甚深の妙義中より其の一端を略辯したるのみ今日まで何等の支障なく滿講に及ぶは佛天の加被力と大衆諸君の助力とに依ると感佩す

正信念佛偈講義 終

大正五年六月二十七日印刷
大正五年七月　一　日發行

非賣品

京都府愛宕郡上賀茂村字小山
眞宗大谷大學內
編輯兼發行者　安居事務所
右代表者　沼波政憲

京都市下京區中珠數屋町通烏丸東入ル
廿人講町廿二番戸
印刷者　西村七兵衛
印刷所　法藏館活版部

328
427

終